

今週の為替相場見通し(2025年1月7日)

総括表		先々週・先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		156.02 ~ 158.09	157.30	155.50 ~ 161.00
ユーロ	(ドル)		1.0225 ~ 1.0458	1.0309	1.0200 ~ 1.0400
(1ユーロ=)	(円)		160.93 ~ 164.90	162.20	159.10 ~ 165.40
英ポンド	(ドル)		1.2353 ~ 1.2592	1.2424	1.2300 ~ 1.2600
(1英ポンド=)	(円)	*	194.20 ~ 198.96	195.42	193.00 ~ 199.00
豪ドル	(ドル)		0.6179 ~ 0.6264	0.6214	0.6100 ~ 0.6300
(1豪ドル=)	(円)	*	96.94 ~ 98.74	97.78	96.50 ~ 99.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 部坂 洋太郎

(1)今週の予想レンジ: 155.50 ~ 161.00 円

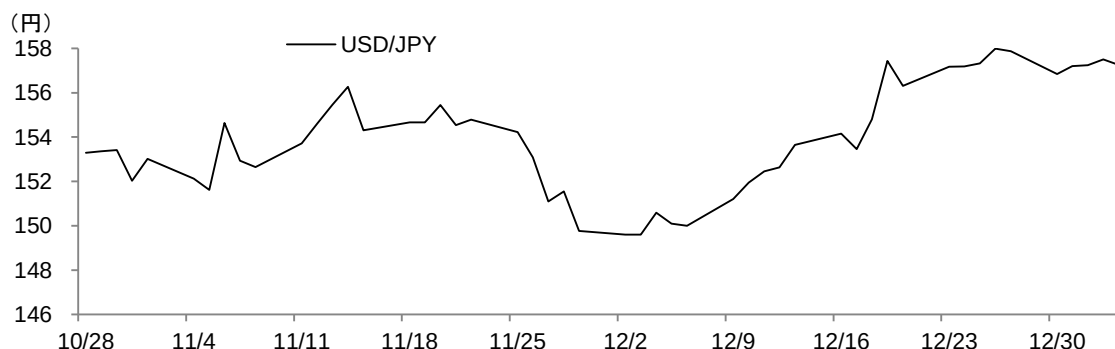
(2)ポイント【先々週・先週の回顧と今週の見通し】

12月23日のドル/円は156.55円でオープン。発表された米経済指標は弱い内容であったが米金利上昇を背景にドル/円は底堅い推移となり、157円台に上昇。24日、東京時間に加藤財務大臣からの円安牽制発言を受けてドル/円は157円を割り込む場面もあったがすぐに買い戻され157円前半で方向感のない値動きとなった。25日はクリスマス休暇で流動性の薄いなか、日銀の植田総裁講演も目新しい材料はなく市場への影響は限定的となった。26日は、欧州が引き続き休場のなかNY時間にドル/円は米株高を背景に一時158.09円まで上昇。27日、NY時間に一時157.35円まで下落する場面もあったがすぐさま買い戻され、流動性の薄い中157円台後半で値動きする展開となった。30日、日本時間に月末実需のフローから158.07円まで上昇するも、米国時間に米金利低下を背景に156円台まで下落した。31日、流動性の薄いなかポジション調整によるドル売りによって一時156.02円まで下落するもその後ドルは買い戻され157円台前半まで値を戻した。年明け1月2日のドル/円は157円台を挟んだ値動きとなり、一時156.44円まで下落するも米国時間には157.85円まで反発となり上下値動きの荒い展開となった。3日、米12月ISM製造業景況指数の結果を受けて157.50円まで上昇するも、勢いは続かず157.30円でクローズ。

今週のドル/円は堅調な展開を予想。FRBは2025年における利下げの回数を2回と想定しているが、直近の米12月ISM製造業景況指数の数値も新規受注を中心に底堅い結果となっており、想定通りに利下げが進むかどうかは懐疑的な状況。基本的には日米金利差に起因するドル買い・円売りという構図は変わらず、ドル/円は高値を切り上げていく展開になるのではないかと。米CFTCによる投機筋のポジション動向においても、2024年12月10日以降円ショートポジションが増加している状況であるが、2024年7月のポジション状況と比較すると円ショートポジションの拡大余地は相応にあり、投機筋による円キャリートレードの再燃も円安の一つの材料となる。今週は7日(火)に米12月ISM非製造業景況指数、8日(水)にFOMC議事要旨、10日(金)に米12月雇用統計が発表予定となっている。注目されている米12月雇用統計については、先月発表された結果が良好な内容であったため、今月発表の予想については減速が織り込まれている。ただし、想定以上に強い内容となった際には160円を上抜ける可能性に留意が必要。

(3)先々週・先週までの相場の推移

先々週・先週(12/23~1/3)の値動き: 安値 156.02 円 高値 158.09 円 終値 157.30 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第一チーム 山田 隆広

(1) 今週の予想レンジ: 1.0200 ~ 1.0400 159.10 ~ 165.40 円

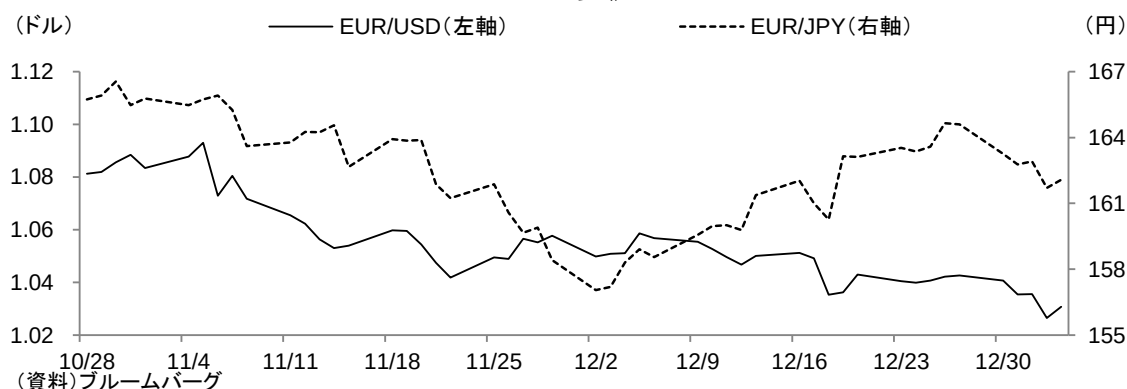
(2) ポイント【先々週・先週の回顧と今週の見通し】

12月23日週のユーロ/ドルは狭いレンジで方向感なく推移。週初23日、ユーロ/ドルは1.0436でオープン。一時1.0448まで上昇も、米金利上昇に連れて1.0385まで急落し、売り一巡後は1.04台まで買い戻された。24～26日にかけてはクリスマス休暇に絡み市場参加者が限られるなか1.04近辺で動意薄。26日は、休暇明けの米国勢によりユーロに押し目買いが入ったとみられ、1.0430まで急伸。27日、前日の反動から1.04近辺まで下落後、休暇明けの欧州勢がユーロ買いを主導。下に往って来いとなり、結局1.0433で越週。12月30日週のユーロ/ドルは下落。週初30日、ユーロ/ドルは1.0430でオープン後、東京時間は休日と年末年始の狭間で薄商いとなるなかで方向感を欠いた。海外時間には米金利低下を背景に週高値の1.0458まで上昇するも、独金利低下などから1.03台に急落。31日、海外時間を中心に年末前のポジション調整に加え、米金利上昇が重なったことでドル買い優勢となり、1.03台半ばまで下落。1月2日、米新規失業保険申請者件数が予想対比良好な結果となったことでドル全面高の展開。週安値となる1.0225に下落後、1.02台半ばでもみ合い。3日、前日の反動からじり高で推移。米12月ISM製造業景況指数が予想外に上昇したことを受けて一時売られるも、1.0309まで値を戻して越週。

今週のユーロ/ドルは軟調に推移すると予想。底堅く推移する米国経済とFRBの利下げ見送り観測によりドルが強含みとなる一方、ユーロ圏の経済並びに政局に対する不透明感とECBによる金融緩和継続姿勢がユーロに下押し圧力をかける構図となろう。トランプ次期米大統領によるEV、関税政策にかかる突発的な発言に伴う急落リスクは考慮に入れておきたい。注目の経済指標は10日(金)米12月雇用統計、独11月経常収支。輸出の対中依存度が高いドイツでは、中国の景気減速などを背景に2024年以降製造業PMIが50を割り込んでいるほか、シュルツ独首相の信任投票が議会で否決されたことで、20年ぶりの解散総選挙に発展するなど政情不安が高まっている。茲許労働市場需給に緩和がみられているが、独自自動車大手による国内工場閉鎖及び従業員解雇が発表されるなど先行き不透明感は増大傾向。ユーロ圏経済をけん引してきたドイツ経済の低迷長期化が改めて確認されれば、もう一段のユーロ安に繋がる可能性も考えられる。他方で、米国サイドでは、発表される経済指標が予想対比大幅に悪化しない限り、1月FOMCにおける利下げ見送り観測には影響を及ぼさないだろう。トランプ氏の保護主義的な各種政策による、米国経済の独り勝ちを見越したドル買いの地合いは継続しそうだ。

(3) 先々週・先週までの相場の推移

先々週・先週(12/23～1/3)の値動き: (対ドル) 安値 1.0225 高値 1.0458 終値 1.0309
(対円) 安値 160.93 高値 164.90 終値 162.20



3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.2300 ~ 1.2600 193.00 ~ 199.00 円

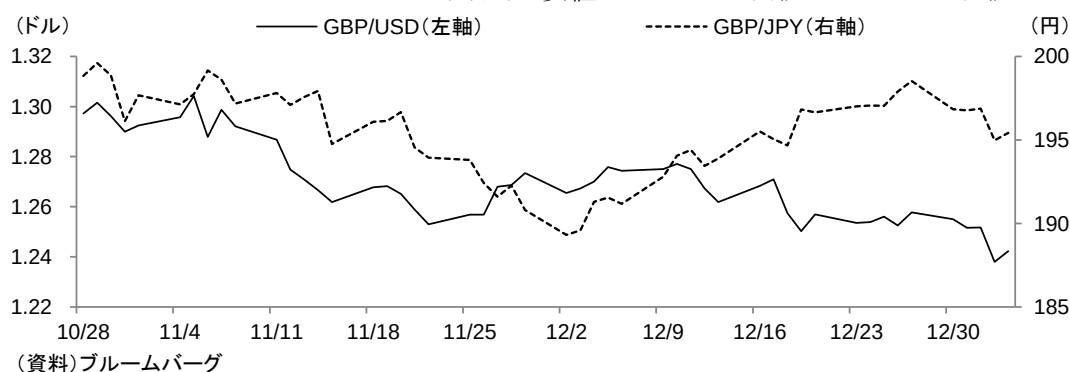
(2) ポイント【先々週・先週の回顧と今週の見通し】

先週までの英ポンド相場は、対ドルで下落。23日に1.25台後半で取引開始。クリスマスから年末にかけてはホリデーシーズンであったこともあり、閑散の中1.25～1.26レベルでもみ合ったが、年明け1月2日は明確なドル買い地合い。背景は明確ではなかったが、市場では天然ガス価格の上昇懸念による欧州通貨弱含みや人民元売りの反動などの声が聞かれた。朝方に英12月製造業PMIが速報値から悪化したこともあって英ポンドは特に弱含み、1.23台半ばまで急落した。週末3日は、前日の反発で1.24ちょうどを挟んだもみ合い。午後に米12月ISM製造業景況指数が予想を上回ったがドル買いは限定的だった。対円でも下落。12月23日に196円台で始まったあとは、特段の材料もない中で198円台後半まで上昇する場面もあったが結局196円台で年末を迎える。年初1月2日は日本が休日の中、英ポンド安につられ194円台前半まで急落。3日は英ポンド反発につれて195円レベルで週末を迎えた。

今週の英ポンド相場は、対ドルで上値重い展開を予想。英国側から特段の材料もなく、どちらかというドルの変動に振られる展開となりそう。米経済指標では7日(火)の米12月ISM非製造業景況指数や10日(金)の米12月雇用統計などの注目指標が多い。ドルは対ユーロでもすでに2022年以降のパリティを窺う勢いとなっており、トランプ政権の発足とFedのタカ派シフトを背景に、よほどの指標の悪化がない限りはドル買いトレンドの転換は見込みにくい。とはいえ、先週末のドル買いが急だったこともあり、英ポンドは昨年安値の1.23レベルではテクニカルで反発ポイントと当面はなるか。なお、オプション市場で観測されるインプライドボラティリティは、今週1週間に対ドルで上下に約1%程度の変動を見込んでいる模様だ。

(3) 先々週・先週までの相場の推移

先々週・先週(12/23～1/3)の値動き: (対ドル) 安値 1.2353 高値 1.2592 終値 1.2424
(対円) 安値 194.20 高値 198.96 終値 195.42



4. 豪ドル

金融市場部 アジア・オセアニア資金部 シドニー室 樋上 陽一

(1) 今週の予想レンジ: 0.6100 ~ 0.6300

96.50 ~ 99.00 円

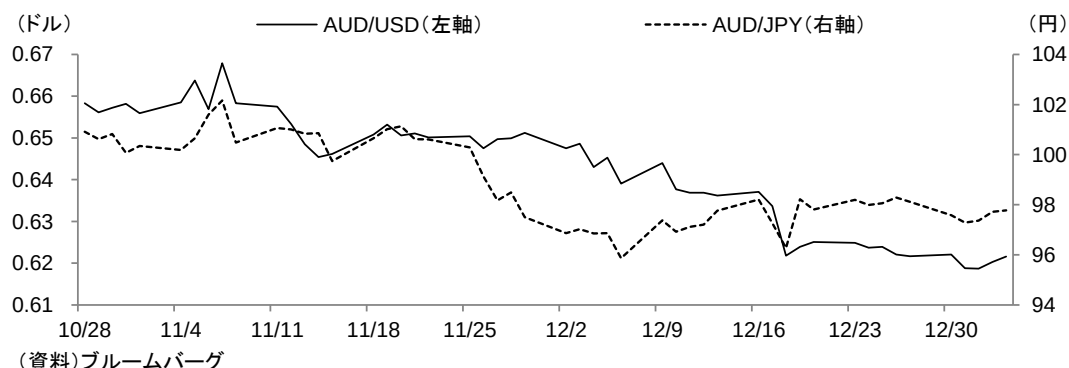
(2) ポイント【先々週・先週の回顧と今週の見通し】

12月23日～1月6日の豪ドル相場(対ドル)は、年末の取引が薄い時間帯に一時2年2か月ぶりの豪ドル安水準で取引されるも、その後は0.62台を回復。その後、方向感を探る展開となった。12月18日のFOMC後に0.63を明確に割り込み、今年の勝負あり、といった趣きの中、23日のオープンには0.6260近辺と前週末の終値と比べて同水準。米大統領選挙後の為替市場のモメンタムに加え、12月は4日の豪7～9が月GDPが前月比、前年比ともに市場予想を下回ったこと、10日にはオーストラリア準備銀行(RBA)理事会がハト派転じたことなど豪ドル売り材料に事欠かない状況。クリスマス週で市場参加者が極端に少ない中で自立反発の勢いも限定的とみられ、FOMC後に一旦サポートされた0.62丁度をブレイクしに行く動きを想定。しかしながらさすがに勢いみられず、軟調な展開に終始し0.6215で越週。年末年始週となった30日は0.6225でオープン、豪ドルの軟調地合いから31日には0.62丁度をクリアに割り込み、2022年10月以来の豪ドル安水準となる0.6179で一時取引された。しかしながら年明けは、更なる豪ドル安の誘因となる好調な米経済指標(新規失業保険申請件数、12月ISM製造業景況感指数)を消化しながら、最近の中国の景気刺激策期待や、ここ数か月の豪ドル安トレンドの一服感から0.62台を回復して0.6214で3日は取引クローズ。6日も引き続き0.62台前半で方向感を探る展開。(6日シドニー時間19時現在)

今週の豪ドル相場(対ドル)は、ホリデーシーズン終了でいよいよ市場参加者が戻り、方向感が出るかに注目。豪、中国の経済指標で強めの数字が出れば豪ドルの買い戻しも想定される。また足許のインプライド金利は5月までに利下げを2回(1回25bp)織り込み済み。2024年12月初時点の2回の利下げ時期が9月末だったことを考えると、ある程度、利下げの織り込みが進んだともいえよう。また、セオリー通りであれば10日(金)の米12月雇用統計まではポジションを取りづらいたともいえようか。とはいえ、これだけでドル高モメンタムに抗うことができるかは疑問。トランプ大統領の正式就任までは、豪ドル買い材料に乏しく、下値を探る展開をメインシナリオとしたい。遠いと思っていた22年の豪ドル相場の安値である0.61台後半は、年末に取引をプリントしてもはやサポートレベルにもなりそうになり。その水準を抜けるとコロナ禍時に割り込んだ0.6000割れも視野に入るので非常にボラティルな相場には注意が必要か。

(3) 先々週・先週までの相場の推移

先々週・先週(12/23～1/3)の値動き: (対ドル) 安値 0.6179 高値 0.6264 終値 0.6214
(対円) 安値 96.94 高値 98.74 終値 97.78



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。